初乗り

いかるがつみき

恋……それは距離でも時間でもない
初乗り……それはみじかいみじかい恋の貸し切り運賃
新進気鋭いかるがつみきが描くアラサーOLやさぐれ純愛記

知古文庫

初乗り

いかるがつみき

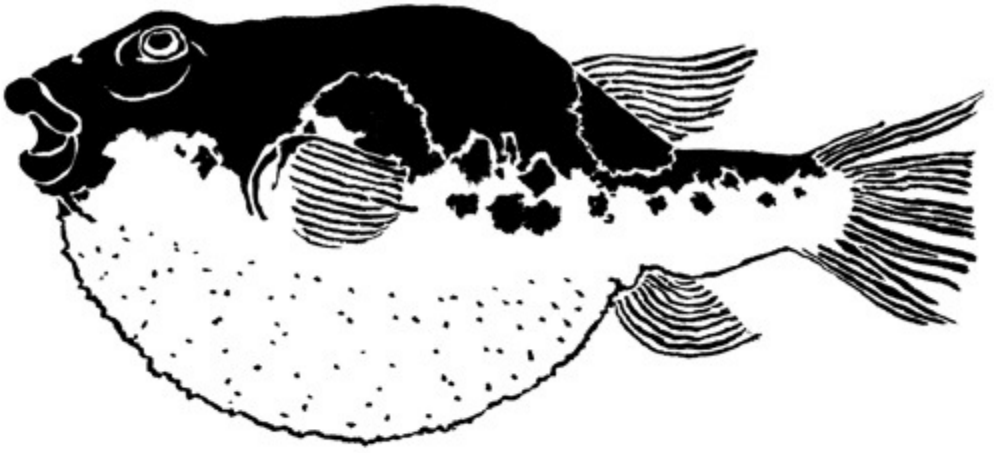
HA TSU NO RI
by Tsumiki Ikaruga
published by Chicoshop

copyright © 2013 Chicoshop ~ https://www.facebook.com/chicosohop ♥ copyright © 2013 Tsumiki Ikaruga ~ http://ameblo.jp/tarareba-world/ ♥ illustrations copylight © 2013 Chico Tsutomu ~ http://www2.tba.t-com.ne.jp/hagami/less/ , https://www.facebook.com/chicoshopa

10 9 8 7 6 5 4 3 2

All rights reserved. No part of this book may be reproduced in any form or by any means without the prior written consent of the publisher, excepting brief quotes used in reviews.

prited and bound by Japan in Chicoshop



初乗り

タクシーの運転手なんて、だいたいオジサン、それかオジイサンだと思っていた。たいていは会社を早めに抜けだした人だとか、なんらかの理由で組織には適さない――例えば口下手だとか、人嫌いだとか、そんなイメージだった。この考え自体が偏見なのだが、そもそもマナーの悪い運転をするタクシーが多い。勿論、善良な運転手が大部分で、運悪くそういう運転手ばかり目にしていたのだろう。だけど、我が物顔で、よもや「運転のプロだ」といわんばかりに、歩道をすれすれに走行したりだとか、信号が変わるぎりぎりのタイミングで横切って来たりだとか、なんとも癪に障るケースに遭うことが多い。そんなのばかりだと、彼らのことを疑ってしまうのだ。そもそも私自身、免許を取ろうとしないひとつの理由にもなっているのだが――私がまだ小学生の頃のことだった。通学路を並んで歩いていた私は、赤信号で停まっていときに、横からけたたましくクラクションを鳴らされ、肝を潰すような思いをしたことがある。確認してみても、信号は間違っていないし、周りにいる小学生の誰もなにも悪いことはしていない。あとで知ったことだが、車同士、道を譲り合ったときにクラクションを鳴らしてお礼を交わすことがあるらしい。だけど、歩行者にしてみれば、なんの前触れもなく突然脇からクラクションを鳴らされるわけで、騒音以外のなにものでもない。ただでさえ注意を喚起するために敢えておおきい音が出るように造られているものなのだから、運転手の自己満足のためにあたりに騒音を撒き散らすなんてことをされては、歩行者は堪ったものではない。車道に出るために、歩道を塞ぎ、車が途切れるのを待っている光景にも憤慨する。なにを上から見ているんだ。歩行者を妨げる権利など、おまえたちには無いと云いたい。車で轢(ひ)けば歩行者なんて簡単に殺すことができる。

車のほうが堅いし、強い（事故を起こしたときの罪は車のほうがおおきいか）。しかし、だからこそ運転手は謙虚でなければいけない。歩道は歩行者が歩くためにあるのだから、その歩行者が来たときには退くのがあたりまえだ。そんな車は蹴っとばしてやりたい。小回りがきかないのは判る。だけど、力のあるものが、力のないものの行動を妨げてはいけない。それは無意識の底にある強者の傲慢なのだ。常に注意をして、意識をしないといけない。私は弱者のままで良い。

♥

金曜日のことだった。いや、すでに土曜日。その日は会社の飲み会があった。駅前のちいさなところで、見かけは綺麗だが、中へ入ると閑古鳥が啼いているような店だった。ほとんどお酒が呑めないので、いつもなら、インコが水を飲むようにちびちびと口をつけるだけで誤魔化しているのだが、その日は長い時間つきあわされた。粘ってカシス・オレンジを2杯まで。でも、それだけで千鳥足になるのに十分だった。

気分は悪かったが、記憶ははっきりしている。同僚はしきりに「送る」と云っていたが、──みんな男性だったし、よこしまになにを考えていたのか、思いだすと今でも吐き気を催す──ぶちまけてしまいそうなのを押さえながら、強情に振り払って、なんとか電車に逃げ込んだ。

最寄り駅に降りたとき、少し持ち直していたものの、さすがに駅から部屋まで歩く自信はなかった。ロータリーに、いかにも待ち受けるように並ぶ黒いタクシーの列。烏合の衆……カモになるのは気にくわなかったけれど、仕方なかった。とにかく家に、落ち着きたかった。

♥

初乗り料金で済んだ。

タクシーの運転手についての私の先入観はさっき書いたのでもう御存知

だと思う。気分も悪かったし、運転手なんかにさほど気を払っていなかったので、さっさとお金を払って、それで終わりのはずだった。振り返ったときに見た顔は意外にも若くて――それでも、30代半ばだとは思うが、いや、でも、眼は澄んでいた。顎ががっしりと、髭も綺麗に剃られていて、髪もいかにも固めたふうでなく自然に整えられて、いままでは親父臭いとしか思えなかった三つ揃えのベストも、ぱりっ、と着こなしていた。

タイプだった。

全体的に理想的だった。車内で煩わしい話を振ってもこなかったし、降り際、必要なことだけしっかりと、私の目を見て（声も素敵だった！）おつりを手渡してくれた。触れた手の感じが白手袋越しだけどがっちりと感じられて、できることなら、このまま、もう1度手を挙げて、彼のタクシーに乗り込んで、どこまでも乗せていって貰いたかった。

部屋に戻って、シャワーで汗を流しながら、吐いた。

全部出してしまった所為だろう、次の日の朝には、身体も、頭も順調に回復していた。冷たいベッドの中で静かに思う、もう、つきあいでもお酒なんて呑むものか。そして、冷静になったからこそ、考えだしてしまった。「昨日のタクシー運転手は、本当によかったのだろうか？」

お酒を呑んでも、胃から中心に身体が調子悪くなるだけ。だけど、気分が高揚しないわけではない。大学生のときに初めてつきあった彼には、お酒の力を借りてアプローチしたし、お酒の所為にして、ふしだらな遊びをしたこともある。ほんのひとくち、グラス半分くらいまでなら良い興奮剤なんだ。頬が赧（アカ）くなって、「酔うと可愛いね」なんて云われて、内気な私の気分も開放的になって、人肌さみしくなって、甘えたくなって、その勢いのままに任せてしまう。オープンになってしまうこともあるんだ。だから……もしかして、昨晩逢った運転手は、お酒が曇らせていただけで、もしかすると、それは、オジサンとかオジイサンってほどの歳ではなかったにしても、なんてことはない普通の男の人だったのかも知れない。

冷静になってみると意外とつまらないものだ。そもそも、彼氏と別れてはや2年、そろそろ、勝手な妄想を始める頃なのかもしれないな……

♥

飲み会の後遺症で、安静にせざるを得なかった週末のあとの月曜日なんて、最低だ。もう忘れたい飲み会の後日談を同僚に振られるし（話していた内容なんて、上司への社交辞令と会社の悪口だけだろうに）、私の醜態を蒸し返されても腹が立つだけ。できるだけ知らん振りの無視。でも、それだけで、なにも変わらない1日のはずだった。

昼休みに掛かってきたクレームの電話で、大幅に残業しなければならなかった。本当は徹夜、でも、焦っても仕方ないからと、課長に帰された。正直、もう部署内の社員全員心が折れてコールド・ゲーム。どのみち、こんな状態じゃなにも捗らなかったろう。帰りの電車の中は溜息しか出なかった。

最寄り駅に着くと、先日見たのとおなじ光景。そうか、もう、飲み会あけのサラリーマンを迎え撃つタクシーの列が待ちかまえている時間だ。綺麗に並んだ隊列、入場行進じゃあるまいし……横をすり抜け帰ろうとすると、ふいにあの運転手の横顔が見えた。酔っていたけど顔を覚えている。暗くてはっきりとしないが、確かにあの人。実在したんだ……なんて、伝記の中でしか知らないベーブ・ルースに逢ったような感覚。確かに、見た目はなかなか、だけど、私が本当に知りたい疑問、あの人が本当にタイプの男性かどうかは、車の外からは感じ取ることができなかった。

どうしよう……まさか、ここでタクシーのドアをノックして確かめてみたりなんて、そんなのは破廉恥すぎる。でも、本当に素敵な人だったら、こんなチャンスをみすみす逃すなんて、まさか、遠くから眺めているだけなんて、そんな未成年の少女のような甘酸っぱい感情だけで満たされる歳ではないし、こんな巡り合わせを指を銜（くわ）えて見ているだけだとすぐに過ぎ去っていくことなんて、経験上判っている、でも戸惑いと、タクシーなんてもったいなくて。──確かめてみよう。

お酒の入っていない、今の瞳(メ)で。こんなもやもやを部屋に持ち帰って、どうにもなるものじゃない。私はすぐ近くにある、窓からロータリーが一望できる喫茶店に入り、外野席からそのタクシーが列のいちばん頭になる瞬間を待った。

私のマンションまでは初乗り料金で十分だった。

運転手はドアを開けるときにこちらを振り返らなかった。ルームミラーから見える顔は全体を映さず、うしろから見える輪郭と併せて想像するより仕方ない。初乗りだから、すぐ着いた。マウンドまでのリリーフカーに乗ったくらいの短い距離。わざと万札で料金を支払った。お金を受けとるときになって、初めてちゃんと正面から顔を見た。おつりを受けとる白手袋越しの手の感触も確かめた。―間違いなかった。どストライクだった。いや、私のストライクというか、多分世の中の女性に問うて、かなりの打率をマークできる男の人だと思う。もう、こうなったら、見逃しなんて考えず、デッドボール覚悟で内角を抉(エグ)りこむように攻め込むだけだ。だけど、そのとき、固まってしまってなにも云えなかった。弱虫の私が現れて、私の喉を塞いだ。そのまま、ドアが閉まるのを見送った。できることなら、10メートル先まで駆けていって、もう1度手を挙げて、彼のタクシーに乗り込んで、どこまでも乗せていって貰いたかった。

♥

次の日の出勤のときに考えていた。そういえばタクシーのダッシュボードには、運転手の名前が書いてあったはずだ。昨晩は、メーターすら見ずに、運転手の顔だけを窺っていたから、そんなことすっかり忘れていた。なんて迂闊なんだ、私。

最寄り駅にはデパートが隣接していて、デパートにはあたりまえだが、1階に化粧品売り場が出店していた。普段の会社用の事務的なメークしかしていなかったし、彼氏がいなくなってから、特別飾ることなんて考えてたこともなかった。今日は、ここで、気分も映えるように、チークを少し濃いめに……夜の暗さにもぱっちり見えるような……それでいてやわらかく……小一時間、

化粧品店の店員と会議・談義を重ねたのち、タクシーを待った。

初乗り料金の短いストローク――無口だった。いつものようにラジオも、ミュージックも掛かっていない静かな車内に、チクタク、彼の腕時計のクロック音だけが響く。オジサンとかオジイサンとか特有の図々しさがないのは、まだ若いからだろうか。それとも、性格。もしかして、口下手だとか、人嫌いだとか、なんらかの理由で組織には適さないタイプの人なのかもしれない。でも……顔と雰囲気と、若さを差し引いて、あぶない領域に達していないほどの人（極端なオタクとか女装趣味とか）ならOKかなって思った。せめて、それだけでも探り出せればいいかな。

横からおおきなトラックが追いこしていく。

「運転手さん、このあたりに住んでいるんですか？」

「……ええ」

低い声で云った。その低い声の調子にうっとりして、満足してしまったんだ。いや、それに、その端的な応えには、それ以上のトークはなにも受けつけないような響きがあった。私は、それで口をつぐんでしまった。絶句。また、私の弱虫が顔を出し始めた。

彼の声は、真面目そうで、少し哀しそうな、冷たい声にも思えた。でも、それでいて心地よくて、もっと聴きたいと思わせるような。目を閉じると木立に掛かったハンモックの中でたゆたっているような気分……「着きましたよ」と云われ、我に返った。そしてダッシュボードをチェックすることも。少しもたついたふりをしながら、名前と、なるたけこの時間を引き延ばせるように。運転手は相変わらず事務的に淡々とこなす。突然、話し掛けられて気分を悪くしただろうか。これだけでは窺えない。おつりを貰うとき、また、そっと白手袋越しの手の感触を確かめていたら、運転者は私の顔を見て、おっ、という顔をした。私の顔を覚えていてくれたのかもしれない（考えてみれば3回も乗っているのだからあたりまえの気もするが）。少し唇の端が笑ったようにも思えた。できることなら、運転席にあるドアのレバーを奪いとって、もう1度手をドアを

閉めて、彼の運転に任せて、どこまでも乗せていって貰いたかった。

♥

次の日の朝の電車の中で思い出していた。私の初恋の話。私は内気な女の子だった（今でも変わらないか）。あまり話すのも上手くない、私に話し掛けてくる男の子なんていなかったし、親しくなる子もいなかった。まだ小学生のあの頃、初めて好きになったあの子。ちょっと背がちいさくて、馬鹿にされていた。ぶっきらぼうで、あまり友だちと仲良く行動するような子じゃなかった。寡黙なために、同級生から顰蹙（ヒンシュク）をかうことも多々あった。よくケンカをしていたのを憶えている。だけど、決して自分の力を誇示するためだとか、我儘（ワガママ）を通すだけの理不尽な暴力など振るわなかった。意地を護るため。ケンカで負けても、勝ってもなにも云わない、だけど、その瞳の奥に強い心があって、無為に暴力を揮う悪ガキとは違う、確固とした信念が宿っているのが判った。

免許を取らないふたつ目の理由―ある夕陽の道。塾の帰りに薄暗くなり始めた道を歩いていた。そこは大通りから1本曲がった道で、少し見通しの悪いところだった。突然、角から曲がってきた車に驚いて、私は尻餅をついた。ニヤミスしたが、事故にはいたらなかった。だけど、けたたましく鳴らされたクラクションと、なにもなかったようにスピードを上げて去っていく車に、私は悔しくて、恥ずかしくて、なにごともなかったように、その場から逃げ去った。

足を挫いていた。靴下をまくると腫れてるのが目に見えて判る。近くにあった公園に逃げ込んだ私は、痛みで歩くことができなくなっていたけれど、知っている人も居らず、元来の内気さも相俟って、誰にも助けを求めることができずベンチでうずくまっていた。そのとき、あの子が近づいてきた。「背中に乗れよ」きっと、後にも先にも、あの子が目に見えて優しい態度を取ったのは、この時以外にないだろう。きっとあの子も、私とおなじく人に心を開くのが苦手で、感情を他人に悟られるのを良しとしていないだろうに、最上級の

優しさを私に見せてくれた。おぶって家まで――私よりちいさかったのだから、大変だったに違いない――家の玄関で着くと、あの子は、お礼も聞かず、ぶっきらぼうに振り返り、帰っていった。優しい子だった。確信した。そして、誰にでも優しい訳じゃない。それ以来、私に対して、ことのほか優しく接してくれた。私も、その子を他の男の子とは違う、優しさで接していた。私だけが知っているあの子の優しさ――私だけがそれを感じ取っていて、感じ取っていることに、彼も気づいていたはずだ。ふたりは心の奥で繋がっていたんだ。だけど、お互いにどうこうある訳でもなく（どうこうする齢でもなかったし）、学校が別れ、いつの間にか、遠い存在になってしまった。彼が、今、どこでなにをしているかも判らない。せめて、卒業のときに連絡先を、いや、私がそんなだいそれたことなど、でも、せめて、もっとこと葉を交わしておけば……

♥

少し強引で、ともすれば尻軽に思われるかもしれないけれど、初乗りの短い時間の中でなんとかしないと後悔する、と、駅のお手洗いの中、鏡の中の自分を見詰め、心の中で決心した。

まずは、顔の筋肉をほぐす。次に、できるだけ印象が良いであろう台詞を、心の中で笑顔と絡ませながら喋る練習。スカートをたくし上げ、ちょっとだけ短めのスコートのような襞のこまかいプリーツスカート。勿論、最終手段は、昨日のデパートでごり押しされた化粧品の上塗り。あの店員くらい、蝋人形のように作りあげた笑顔も気持ち悪いと云えば悪いが、あの高等偽装能力は敬服に値する。あとはロータリーに行く時間まで喫茶店で時間を潰す。4回目ともなると慣れたもので、彼のタクシーの形も、ナンバーもバッチリ心得ていた。あとは待つだけ……

勿論、初乗り料金。タクシーに乗り込んで、行き先を告げたら、ゲームのコール。行き先も、私の声も覚えているようで、一瞬戸惑う雰囲気を見せた。ルームミラー越しに私を覗きこむ姿が見える。ここに攻め込まない手

はないだろう。

「偶然ですね」

「……え、ええ。……本当に……」

運転手は気づいただろうか。私が待ち伏せしていること。考えてみたら、やっていることはストーカーすれすれかもしれない、という不安感が襲ってきたので、なにげないふうをできるだけ装うことに努めた。見た目おかしく思われないように、多少、手は加えたけれど、多分、今日の格好は普通に通勤していてもおかしくないし、大丈夫、こまかいところ、やりすぎていなければ。とにかく気持ち悪く思われたらお終いだ。

「……いつも、ご帰宅が遅い時間なんですね」

まさかの先制攻撃を喰らった。なにげない雑談のパターンをなん十通りも考えて、さらに、その返答に対する返しまでシュミレーションしていたのに、まさか、サービス権を取られるなんて。

「え、ええ……ちょっと、今の時期、忙しくて……」

「お疲れさまです」

レシーブにもたついて、最後のあたりは口籠もってしまった。そうか、相手もプロなんだ。多分、煩わしい会話の経験なんて、たくさんしているのだろう。あたりさわりなく、そして、ややこしくならない程度のおあつらえ向きの会話の手段を、なん十通り、いや、なん百通りも持っているんだ。

すぐに挫かれゲーム・セット。アウトにならない話題を振ろうと考えて考えて、ネットに引っかけてしまった。心情ラブ・ゲームだった。あとは、いつもの通り料金を徴収されて帰るだけ。うちひしがれながら、おつりを受けとるときに、意を決して最後のストロークに打って出た。

「また……お逢いできたら良いですね」

「え、ええ……」

バックハンドから白手袋を少し包む感じで、とびきりの笑顔で云ってやった。運転手は少しどぎまぎしたふうだった。良かった。多分、今日のアイ・

ｼｬﾄﾞｳの色が功を奏した。なん度も確認して、うまくいったと思ってたんだ。閉まったﾄﾞｱ越しに、振り返った。目が合って、少し笑ったんだ。

なんて云うか、ｶﾞｯﾂﾎﾟｰｽﾞ！　計画していたところまでは到達しなかったけれど、これで印象の世界ﾗﾝｷﾝｸﾞがかなりｱｯﾌﾟしたに違いない。少なくとも……あの表情から、私を不快だとは思っていないはずだ。嬉しい。できることなら、このまま、もう1度乗り込んで、運転席にある、どのｽｲｯﾁだか判らないけど、奪って、“貸切”表示にして、彼のﾀｸｼｰで、どこまでも乗せていって貰いたかった。

♥

考えてみたら、内気な所為もあってか、このかた、自分から口説くなんて発想がなかった。と云うより、もともと恋愛に興味が薄く、前の彼氏とあんな別れかたをしなければ、いま、こうやって人肌さみしく、無性に恋したいなんて、思わなかったはずだ。前の彼氏とは長いこと時間が掛かって、やっとつきあった。お互い友だちの期間が長かった。初めて見たときから、淡い恋心をいだいていたものの、持ち前の内気さで、なかなか切り出せず、それどころか、まともに話をできるようになるまでずいぶん時間が掛かったものだ。少しずつ、少しずつ近づいていった。意識し合ってから、互いに好意を確信して、それでも、私の内気は治ることなく、最後は、お酒の力を借りた。にもかかわらず、最終的には全部相手に任せて、とりまとめて貰った。とっても、内心、弱虫なんだ。そんな不器用なやりかたばかりしていたから、別れるときはつらかった。悲しかった。今まで積み上げてきたものが消え去っていくようで、さびしかった。これから独りなんて、堪えられないと思っていた。結局は、世界は滅びず、今に至るのだが。

そんなわけで、冷静に考えたら、この先どうしていいのか判らない。帰り道、駅中の本屋さんを巡っていると、店舗の10分の1くらいが女性向け図書のｺｰﾅｰで埋められていることに気づいた。そのほとんどが、占い・美容・

恋愛で、パステルカラーの、いかにもメロウな謳い文句の踊るタイトルばかり。『ゼッタイ彼を振り向かせる方法』……『大人の恋愛マナー』……『男を夢中にさせる恋愛法則』……グッ、と来る。なんて古典的な隙間産業。今の私の心の隙間を捉えて放さない。こんなブリブリのコーナーで立ち読みをしているのも恥ずかしい気がするけれど、なん冊か物色して読んでいた。こんな本を部屋で独り読むなんて、なんて頭の悪そうな女なんだ、って声が頭のサイドからしたけれど、それも恋の魔法に掛かったと思って、楽しむのも良いかな。なん冊か持ってレジに並んだ。

前に並んでいるオジサンのネクタイが曲がっていた。手に持っていたのは、『金持ちがやっている魔法の習慣』と『（たったこれだけで）部下に好かれる上司になる』。

隣の列に並んでいるオジサンの頭がハゲ散らかっていて、首元には頭垢（フケ）が溜まっていた。なにより、裾にカレーの染みっぽい跡がついている。手に持っていたのは、『時間がないと嘆く前に…これだけ・ビジネスの掟』と『超手帳術―勝ち組社長の習慣―』。

時計を見たら、もう頃合いだったので、本を棚に戻してロータリーへ向かった。

♥

私にしかできない方法でいこうと思う。確かに不器用で、かなり見当はずれで、損してると思う。だけど、結局、いきがって見栄を張っても、最後に残るのは不器用な私だ。なら、少しずつ、少しずつ……

例の運転手の前に並んでいるタクシーにお客が乗り込もうとしていた。頃合いを見計らって、なにげなくタクシーの列に近づくと、気が変わったのか、前のお客はきびすを返して駅のほうへ帰っていった。それで、順番が早まって、ひとつ前のタクシーに。私は例の運転手を逃すことになった。

失敗。でも、焦ってもしょうがない。そんな気持ちでいたら、うしろに並んで

いた例の運転手が私に気づいて、軽く手で挨拶をしてきたんだ。私は嬉しくなって、大袈裟に驚いたふり。勿論、昨日の別れ際とおなじ笑顔。それで「そういうことだから」の態(テイ)で、目配せして、例のタクシーに乗り込んでいった。

「また逢いましたね」

「ええ……いつも有難うございます」

寡黙な運転手の、いつもとおなじ、事務的な対応だった。だけど、今日の響きの中には、昨日までとは違う、親しみが籠もった声に感じられた。

初乗り料金のひととき――こういう表現を使えば、少し心地良い時間のように思えるだろう――私は焦らないことにした。この時間と空間を愉しもうと、それだけ。お互いぶっちゃけた会話をして打ち解ける、とは逆の方法で、なにを話さなくともその時間と空間を共有し合って心が安らかになる、自然と存在を認め合うような、そんな方法も良い。内気な私と、寡黙な運転手にぴったりの方法だと思った。そこから、通じ合うなにかを求めよう。実際に、その日から今までのような焦った気持ちはなくなったし、前よりも、タクシーの時間があたたかく感じるようになった。実際、空調がHiになっていたんだ。

でも、さすがに初乗りの時間は短かった。ゆっくり停まり、ドアが開くと外の空気が、外気が流れ込んでくるとともに癒しの時間も終わり。そして、ふ、と不安も襲ってきた。やはり、こんな関係は変なのではないか。初乗りとはいえ毎日タクシーっていうのも生活費に響くのでは、と。この日は札(サツ)を使わず、ぴったり硬貨で払った。運転手はなにも云わず、いつもの通り料金を受けとる、だけど目の奥でほほえんでくれているような、そんな気がした。できることなら、私は、車のボンネットのどこかにあるかもしれない時間が停まる装置を稼働させて、このまま、彼のタクシーに、いつまでも乗っていたかった。

♥

昨日のタクシーの雰囲気は最高だった。手応えがあった。私たちはなにもしなかったし、シートはどちらも進行方向を向いていて、顔を合わせているわけでもない（それどころか、どちらの顔もはっきりと見えていない）。綺麗にしてはいるようだが、シートは堅いし、車特有の籠もった匂いもしている。だけど、闇の中を静かに走る車の中は、大人の雰囲気だった。あの中で、ファーストクラスのリクライニングで寝そべっているような、ブルジョワジーな優雅な気分に浸れた。あの運転手も私に少なからず好意を寄せてくれている、そんな自信も芽生えた。だんだんと想いが加速する……と、気になってくる。相手の瞳（メ）に私がどう映っているのか。

さらに、ちょっとだけ攻撃的な服を選んだ。少し誘っているふうな。どうせ、ロッカーで制服に着替えるのだから、仕事中にどうこう云われることはない。云われるなら、帰りに同僚とすれ違うとき。2年も彼氏がいないで、いつも地味な格好をしていたものだから、噂話しか生き甲斐がないようなババァくさい連中の恰好の的にされてしまう。だから、普通とキメてる感じのあいだのすれすれのラインを狙ったお洒落さにした。成功したかは如何（イカン）？

駅からマンションまで――初乗り料金。こんな短い距離にわざわざタクシーを使うなんて、あの運転手は私のことをブルジョワだと思っているかしら。ただ見栄を張っているだけの女とでも？　もしかしてどちらも。

「こんばんは」

「いつもの所で……大丈夫ですか」

事務的だけど、昨日の続きで、感じがよかった。

「なん度か偶然が続いたから……いまでは、このタクシーのほうが安心するの」

気持ち悪く思われないように、あらかじめ釘を差しておこう。これだけ続いて、偶然だなんて云ったら白々しい。

「……ありがとうございます」

理由を付ければなんとでもなるんだ。たとえば、今日の服だって。今日は会社帰りに友だちと会う約束をしていたから、ちょっと洒落た服を着ているんだとか。ワインを呑んで、チーズをいただくの、ああ、シャンパンも良いわ、なんて、ブルジョワ気取りで。心なしか、今日は、運転手がルームミラーを確認する回数が多い気がする。あの角度から脚が見えるのだろうか？　さりげなく脚を組みかえてみたりして（こういうの、1度やってみたかった）、そしたら、ぴくりと眉が反応した。やっぱり、この運転手も男だってことかしら。

身体に興味を持って貰えたなら、それ以上に、私に興味を持って貰いたいもの。あらかじめ初乗り料金分、用意して置いた。いつものように白手袋で料金を受けとる手に、そっと、料金と、眠気覚まし系ガムを置いた。

「いつも、ありがとう。また、お願いしますね」

不意の行動に運転手は驚いたようで、こと葉に詰まったようだ。私は、（ちょっとあからさまにも見える点数稼ぎを実行するために内心、心臓がバクバクいっていたけれど）さりげなく車を降りた。……ガムだなんて、せせこましかったかな……チップをはずんだりしたほうが優雅かな……そもそも、こんなことをして、どうなるものかしら。

振り返ると運転手は、私を見て笑顔を返した。タクシーは動かない。私がマンションに入るまで見送ってくれている？　なんだか、もう、頭の中でシャンパンタワーにお酒が注がれた。できることなら、車に戻り、電気系統を滅茶苦茶に、パワーウインドウも鍵も中から壊してしまって、このまま、脱出できなくなった彼のタクシーの中でふたり、いつまでも乗っていたかった。

♥

ロッカーで着替えていると、メールが届いた。大学時代の友だちからの誘いだった。私には当然、初乗りタクシーという大航海が待ち受けていたので、さっさと断ろうと思った。だけど、文を読んでいくと、「どうしても人数が足

リなくなったから、お願い」という、悲痛なﾆｭｱﾝｽの含まれた懇願ﾒｰﾙだった。成程、そうでもなければ、私を誘うわけない。かなり癪な感じもするし、それに私にはﾀｸｼｰという先客があるので、断ろうとした。そしたら今度はＫ子からﾒｰﾙ。Ｋ子からも「これから呑まない」的な。勿論、どちらも断るけど、丁度いいから、大学時代の友だちＩ子には「Ｋ子から誘われた」って断ることにしよう。Ｋ子には「Ｉ子に誘われた」って。そしたら、Ｉ子から「よかった。それじゃあ、Ｓ駅でまちあわせね」って返ってきた。しまった。ｱｲﾂら、おなじ飲み会の誘いだったんだ。

そんなわけで、勝ち組と合ｺﾝする事になった。それなりのｲｹﾒﾝだった。身につけているものも一流会社らしく、いいものだ。だけど、あの男たち、私たちの中で誰が一番価値がある女なのか、値踏みするような目つきで嘗め回していた。

ﾊﾞｰは初めて入ったお店で、かなり薄暗い照明。壁におおきな水槽が並んで、ﾈｵﾝﾗｲﾄに照らされた水の中で褐(カチ)色の魚の腹が輝いていた。きっとﾔﾂらの奢りで、それなりにお洒落な店なんだろう。魚が回遊する横をすり抜け、奥の個室へ。熱帯魚だろう。だけど、日本の水道水が身体に合うのだろうか。ゆらゆら泳いでいるけれど、こんな暗い中でほんとうは溺れているんじゃないだろうか。魚の描く不規則な軌道は、少し病的な苦しさに思えた。間近で覗いてみると、彼らの腹の色もあまり綺麗とは思えない。肌荒れだろうか。

席に着くなり、彼らは名刺をとりだし、一流をｱﾋﾟｰﾙしだした。私にとっては興味がなかったし、興味が無ければ、どれもただ字が印字されただけの紙。ばらまかれた名刺で、まるでｶﾙﾀでもやっているような気分だった。だけど、Ｋ子のﾔﾂは、真ん中の男の手にきらきら光る指輪を見詰め、もう目がぎらぎら光っていた。

乾杯ﾄﾞﾘﾝｸ。そういえば、断酒宣言中。ﾊﾅっから気に入らなかったが、「呑まないとたのしくないから」とひたすら呑ませようとしてくる。そもそも、いつもの

フランチャイズ加盟店ノリの安い居酒屋じゃなく、お酒も、フードメニューも、見たことも、聞いたことも、想像もできないような横文字ネーミングで書かれていて、とにかく悩んでいると、「じゃあ口当たりが良いの選んであげるよ」と、さっきの成金趣味の指輪を嵌めた真ん中の男が（偉そうに）代わって注文した。

さすがに、お洒落なお店だけあって、美味しいお酒だった。憶えているのはそれだけで、気がついたら私は、知らない部屋で寝ていた。

……やってしまった。確認してみると、上も下も見事に素っ裸。名前の判らないお酒は、アルコール濃度も判らないから、そもそも、ひとくちで止めなかった時点で溺死だ。なんで、私がお酒を呑めないことを知っていて、止めてくれなかったのだろう。多分、内気な私には酒を呑ませたほうが、浮かれて盛りあがるとでも思ったのだろう。またも、空気を読み負けて、断酒を守らなかった因果応報。隣には、あの成金指輪の男が深海魚のように口をぱくぱくさせながら、満足そうに寝息を立てていた。もう、お酒も、K子も、I子も絶交だ。着るものと貴重品をかき集めて、そっと、部屋をあとにした。外では、まもなく朝の光が射してきて、始発の消耗した雰囲気の乗客に混じって、電車で、私も帰路へと着いた。

なんて脱力感。最寄り駅に着いて、ロータリーの前で回遊する、まばらなタクシーの群れを見た。あの運転手の営業時間はなん時までなのだろう。こんなボロボロの気分のときに優しく、あたたかい海のように包んでくれたなら……でも、こんな穢(ケガ)れた私を彼に見られるのは厭だと思った。多分、ひからびたような、ひどい顔をしてるし、多分、化粧もくたびれてる。あ、泣きたいかも。

隣から、なにか声がする。心は半分幽体離脱状態で仰向けになってプカプカ、実際は足を引きずりながらダラダラ歩いていて、周りの声なんてなにも聞こえないでいた。なにもかもどうでもいい……と、短いクラクション。驚いて振り返ると、そこに、いつもの運転手のタクシーがいた。

♥

「これから、帰るところだったんです」

天秤に掛けたら、「こんなときに逢いたくなかった」と「まさか逢えて嬉しい」が拮抗していた。だけど、私、どんな顔をしていただろう。私のこういう状態……見透かされているようで、始終そわそわしていた。パンツが見つからず、穿いていなかった。

「なので、今日は無料でお送ります。そもそも、こちらから呼び止めてしまったので……」

思った通り優しかった。それだけにつらい。こんな状況じゃなければ、「仕事終わりのあなたの家まで」なんて云って、割増料金でも良いから連れていって貰おうと、勇気を振り絞って云ったかも知れないのに。こんな状態じゃなく、酔った私が目を覚ましたのは運転手の部屋で、そのあといつものタクシーで送っていって貰ってる、とかだったのならば、これほど、最高なことはなかったのに。できることなら、シートベルトの脇あたりに、国家レベルの要人だったら備え付けてあるかもしれない、緊急用非常ボタンを押して、席ごとパラシュートで打ち上げられ、彼の目の前から消えてしまいたかった。

いつものように寡黙に、私のマンションの前までつけ、寡黙にドアを開けてくれた。

「ありがとう……」

かろうじて捻りだしたのはそれだけ。振り返ることはできなかった。それでも、声を聴けたのが嬉しかった。

♥

週末ほど最悪なことはなかった。なにもかも退屈で憂鬱だったし、おなかの中でいまだ蠢(ウゴメ)いているアルコール分の所為で身体も重かった。1日で3回もお風呂に入った。身体の中も外も、汚れてしまっているようで、洗い浚(ザラ)い

流してしまいたかった。浴槽に浸かると、もう動きたくない。身体が溶けて、このままお湯に混ざって、排水溝に流れていってしまえばいいのに。

夜に掛かってきた知らない番号からの電話は、勿論、無視した。多分、飲み会の男なのだろう。憶えていないときに、ｱﾄﾞﾚｽを渡していたに違いない。ついでにＩ子とＫ子も纏(マト)めてｱﾄﾞﾚｽから消去した。

♥

月曜日は眼鏡にした。ｺﾝﾀｸﾄをつけるのが面倒くさくて、とにかく、なにかを身体に入れるのが厭だった。当然食欲もなかった。妙な厚着をして、色も黒ばかりの膨張した色で、身体のどこもかしこも隠したかった。仕事？そんなのﾐｽばかり。

帰りになっても、あのﾀｸｼｰに乗りたいと思えるほど気力は回復していなかった。今日は早く切りあげてきたし、このまま帰ろう。夕飯だって作らない、弁当でも買えば良い。

お弁当屋Ａの揚げ物ﾒﾆｭｰは絶品だ。お弁当屋Ｂの定食ﾒﾆｭｰの豊富さには目を見張るものがある。ｺﾝﾋﾞﾆ弁当も最近はなかなかのもので、捨てがたい。だけど、私が求めているのは、保存料とか、着色料とかの無い、混ぜりけ無いもの。肉質のものでもなく、できるだけ熱量の少ない、そう、野菜が良い……ｶﾌｪＣのﾃｲｸｱｳﾄﾒﾆｭｰに野菜たっぷりの健康ﾒﾆｭｰがあったはず。今日はそれにしよう。

ｶﾌｪＣは、内装に古木の素材を、木目を活かした造りで、おなじく木製のﾃｰﾌﾞﾙは不規則に切り揃えられて、自然を大切にすることをﾃｰﾏにした喫茶店。ﾒﾆｭｰにも、無農薬野菜をふんだんに使った料理が並べられており、作物の状況によっては調理できないことも、また、時には珍しい野菜が届き、特別の一品が出されることもある。おおきく謳ってはいないのだがﾃｲｸｱｳﾄもやっていて、紙のちいさな正方形のお弁当箱に詰めて売りだして、割り箸は付けず、環境のためにﾏｲ箸を使ってくださいなんて、いかにも

洒落ている。店内メニューと同様、野菜が多め、日替わりのバリエーションも豊富、なにより美味しい。優しい。私が求めているのは、そう、この優しさだったんだ。

店内の中に彼がいた。

入り口の近くに座っていて、すぐに私に気づいた。正面から見て、正にあの運転手がそこにいた。私の面(ツラ)を拝むなり、彼は笑顔を私に食らわせた。私は面食らった。

「……ご飯を食べて、これから仕事なんです」

脳が揺れる感覚。こんな笑顔をする人だったのだろうか。それとも、車内じゃ暗くて見えなかったため?

「……今日は、お早いお帰りなんですね」

しかし、ここも間接照明。いや、確かに、この彼は、彼だった。彼は、いつものような寡黙な雰囲気で、遠慮がちな口振り。遠慮がちな彼が寡黙な口元から、こう云いたいのだろうということ葉を、私は察した。

「……ご一緒して良いですか?」

コクリとうなずいた。照れて、「はい」のひとことすらためらってしまった子どもみたいな、その仕草が可愛いらしく思えて、ちょっとだけ嬉しくなった。

「今日も、いらっしゃるかと思って、お待ちするつもりでしたけど……」

「ええ、今日は、これで帰るんです」

彼の前にはロースト・サンドウィッチが置かれていた。推定でこれから8時間勤務だろうに、それでもつの? 減量中とか?

「今日は雰囲気違うんですね」

「……ええ、今日は眼鏡で」

私はエビの入ったジェノベーゼを、たぶん、歯にバジルがついてしまうかもしれなくて、前歯を見せる笑顔は封印せざるを得ないけれど、適度に野菜質な優しさを、まだ欲していた。あ、それと、ワイン……

「地味でしょう? 黒縁で。家でしか掛けないんです」

自暴自棄にも、良い自暴自棄と悪い自暴自棄があって、今日のは前者だ。もし、私が酔って、それで記憶をなくして、それで運転手に送って貰って……朝には素っ裸、それで、いいや。できれば、アレやコレやの記憶が残ってて欲しいけど。

白ワインの味はどうしても好きになれない。あんなに澄んだ透明な振りして、どぎついアルコール分が喉の奥から、脳味噌に突き刺すように殴りつけてくる。でも、このジャブでフェイントをかけたあとにアゴを狙ってまっすぐ打ち込んでくるようなストレートのアルコールのおかげで、私はもっと大胆になれるに違いない。そのための起爆剤。今日の黒々した格好に映えて、赧(アカ)く火照った頬は誘引剤。このままパンチ・ドランカーにでもなって、意識を失って、あなたにすがりついて、捧げてしまいたいの、一切合切。

「……ぼくはそっちのほうが好きだな……おとなしそうで……」

ニュアンスが違っていたとしても、受け取りかたが間違っていたとしても、堪らなかった。それに、このこと葉は、内気な私の心も受け入れてくれた。私の中でゴングのようなけたたましい音が鳴り響いた気がした。できることなら、彼の腕の中という名の、おおきくてあたたかいであろうタクシーに乗り込んで、高速でも光速でも良いから振り切って時空を越えて、どこか、遠くの未来へ連れていって欲しかった。

♥

そう、これは運命だと確信した。

逢いたくないときでも逢った。逢いたいと思っているときでも逢った。

食事のあと、私を家まで送ってくれて、運転手はそのまま仕事場へ、駅前のロータリーで、客という深夜になればなるほどアルコール濃度の高い血液を滾(タギ)らせた会社員たちを待つ、タクシーの列に帰っていった。

ワインをグラス1杯呑んだというのに、私は酔わなかった。ぽつりと云った彼のこと葉が、強引にでももつれ込もうと画策した私のささくれた心を癒して

くれた。タクシーを降りるときに、「私の部屋まで来ませんか？」なんて、云おうと愚策していたけど、すてきな食事で素直にときめいてしまって、なにも云えなくなってしまったんだ。失策。錯視の所為か遠近法の所為か、それでも彼は私を「好き」だと云ってくれた。私はベッドの上で泣きじゃくった。

嬉しかった。

穢れきった私の胸の中に花が咲いた。

彼とはちゃんと交際したい。

お酒とかじゃなくて。

深夜タクシーの収入って安定してるのかな……？

脇でまた知らない番号からの電話が鳴っていた。そのままにして眠った。

♥

いちおう、次の日はコンタクトに戻して、なに気ないふつうの生活を送っているふうにした。心の中では、まだ炎が燃え滾(タギ)っていた。いつもは髪をおろしているけれど、今日はシュシュで束ねて、ちいさなレースのあるブラウスに紺のカーディガン、スカートは裾で広がるプリーツタイプのものにしてみた。地味目だけど、小回りの利く可愛らしさで。

恋はなんて人を弱虫にさせるのだろう。この前、部屋でテレビを見ていたときには、人には聞かせられないスラング的な単語をふんだんに独り言に織り交ぜながら、出演しているお笑い芸人を虫けら以下のように罵っていた。にもかかわらず、今日はできるだけちいさく見えるように可愛らしく装って、足の爪には見えもしないのに薄いペディキュアを塗った。どちらも、本当の私の姿だろうが、いきがって肥大した部分の私は恋の病に薙(ナ)ぎ払われて、心の奥に眠る、まだ無垢な少女の儚い姿だけを浮き彫りにされたよう。希望とか、願いとか、自分の身体の外にある曖昧なものへ、望みを抱くようになってしまう。浄化作用のようなものが、恋にはある。ちなみに、見られて一番可愛い下着をつけた。

恋は私を弱くしたと同時に、強くもした。故意に、もう偶然なんて装わない。来い、勇気。私はまっすぐに彼のタクシーの元へ、ロータリーで並んでいる順番なんて関係ない。

窓を小指でたたく。

「こんばんわ」

ちゃんとお話しよう。それで打ち解けていこう。いきなり高得点を狙わなくて善い。着実に、少しずつ。

「……お待ちしてました」

なんて、早いリーチ。ひとこと目から私の胸のチューリップにバッチリ入り込んできた。

今日もどうせ初乗りの短い時間……

「これ……」

運転手はダッシュボードから手帳を渡してきた。あ、これ、私の……

「この前、座席に置き忘れてあったんです」

「ええ、私の……ありがとうございます」

ちょっと恥ずかしかった。ぜんぜん女の子らしからぬ黒いカバーの粗野な手帳で、そもそもカレンダーが入っていればなんでも良いだけのこだわりのない姿勢が、性格のおおざっぱさを晒(サ)らけ出している気がして。それに、これは、なにかの景品で貰った、まったくありがたみのないものだ。手書きのメモは丸文字だから、その辺は女性らしさをアピールできたかも。

「昨日ご一緒したときに云えばよかったんですが、忘れてしまって……それで、昨晩電話を……」

「え?」

考えてみれば個人情報の問題とか、セキュリティの問題とか、昨今、声高に叫ばれているというのに、律儀にも、手帳の最後のページに自分のアドレスを書き込んでいた。ドナーカードさえも挿んで。

「……すみません、中を……誰のものか判るかと思って、それで連絡先が書

いてあったものだから……なん回か電話をかけたんですけど……やっぱり、知らない番号からの電話は出れませんよね」

まるでラッキー7。労せずに、交換所も通さず、連絡先を交換することができた。

その時、赤信号。運転マナーを守る彼も、「停車したときは」とばかりに、こちらを向いて話してくれた。照れながら……

「……それに、また、夕食でもご一緒したいと思いまして……もし、電話に出たときは、お誘いしようか、なんて……」

私の中に鳴り響く軍艦マーチ。いつでも、どこへでも、手を振って脚を上げて突き進める。確変に継ぐ連チャンにて、もうこのまま際限なくジャンジャン・バリバリ頭の中で出玉祭。それにしても悔やまれる。あの時、電話を取っていたら。

「今から、じゃダメですか？」

「え？」

しらふだった。

「これから……夕食。ご一緒……してくださいません？」

驚くことに、冷静だった。

「どこでも構いません。それに……」

大真面目だった。

「もし……」

大胆だった。

「もし良ければ、私の部屋ででも……」

喉につかえていた玉がポンポン飛び出すように、口から。今までにない私の変化。恥じらいもかなぐり捨てられたのは、花も恥じらいを無くした歳だからか。それとも、もう停まらない回転率の情熱のため？

信号が変わり、車が動き出すと同時に、彼は前を向き、運転ルールを遵守した。そして、いつもの無言……

「……着きました」

回答はいつものタクシー運転手マニュアルに載っている事務的なこと葉だった。事務的にドアも開いた。私の引き当てたフィーバーは急に解けた。おつりを受け取ったときに運転手が見せたのは、険しい面もちだった。まさか、気に障ることを云った？　やめ時なのにもかかわらずお金をつっこみすぎた？　運転手はなにも云わない。私は白手袋の中の体温を感じながら、血の気の引いたような思いの中、悶々とした気持ちでタクシーを降りた。できることなら……電話？

「もしもし……すみません。せっかくお誘いいただいたのに。だけど、仕事の前に食事をすませていますし、いきなりお部屋におじゃまするのも……ぼくは……もっと、ゆっくり、おつきあいさせていただければと思います。もし、ご都合がよろしければ、お互いが休みの日にでも。ぼくの仕事の時間が遅くて申し訳ないのですが……」

振り返ると、まだアイドリング中のタクシーの中で携帯を握る運転手の姿。顔は正面に向けたまま。サイドミラーで私を見つめて。私は、

「次に逢うときは、敬語は辞めてね」

とだけ応えた。

♥

そういえば、今年の初詣に、友だちに「縁結び」に効くパワースポット的な神社に連れていかれた。沸き立った女子中・高・大学生と、少しばかり行き遅れに片足つっこんだアラサー的な風貌の女性たちが、ピンク色の、明らかに合成繊維でできた御守りを買うためにたむろしていた。正直、枯れた私には、ナニもピンとこなかったのだが、おつきあいというか、腐れ縁というか、まあ、大人のつきあいで、私もおみくじを引いた。そのおみくじが、まだ財布の中に残っていた。「待ち人来ず」。丸文字で、あまっさえピンクの文字で書く神様のおみくじほど信憑性の無いものはないだろう。駅のゴミ箱に、

レシートと一緒に捨てた。そもそも信じていなかったけれど、これで清々した。

まだ初々しい中学生の女の子たちが、おみくじの結果を見せ合って、一喜一憂、きゃあきゃあはしゃいでいたっけな。少し真剣に恋愛に悩んでいる顔つきの高校生の女の子たちがおみくじの結果を受けて、御利益覿面(テキメン)の御守りを買い、携帯につけようか、バッグにつけようか、議論を交わし合っていたっけな。思い切って着物を着て初詣にきた大学生の女の子たちが、もう、とにかく携帯でオーラの写真を撮りまくって、参拝の順番割り込みまくって、着崩れしてきた着物をそのままに、おみくじに熱中してゲラゲラ笑い合っていたっけな。参道脇に絵馬がたくさん掛かっていて、そのどれも、「恋人が見つかりますように」か、「彼氏とずっとしあわせでいられますように」のどちらかだった。当たらないよ、その神さん。ざまあみろ。あ、あの時一緒に行ったのは、K子とI子だったっけかな。

♥

私から電話を掛けた。個人的タクシーに。今日は早めに退社したので、彼の出勤前に、食事ができるんじゃないかと思った。まちあわせは前と同じ。代赭(タイシャ)色の床と、木目の温かいテーブル。インテリアふうの台車に飾られた野菜。私は代謝がよくなるオーガニックな温野菜のキーマカレーを、彼はまたサンドウィッチ。紙ナプキンに、ロゴは大蛇のマーク。

どうやらCのカフェは、彼のお気に入りらしい。私も好きだし、彼が好きだってことは、私にとっても、もう、お気に入りってことだ。趣味が合うって素晴らしい。

「……ほんとうは、お酒でも呑んで、話したいですね」

そりゃ、口説く気満々でしょうから、こっちも願ったり叶ったりだけど、落ち着いて、ゆっくり交際するんだから。

「私……実は、あんまりお酒が得意じゃないの」

「あれ？　この前、ワインを……」

ああ、恋というのはなんて蟻地獄的な、動物的構造を持っているのだろう。私の中にはびこる見栄・虚栄心で肥大した心は、先のせばまっていく漏斗に濾されて、だんだんとちいさな、ほんの少女性を秘めた部分だけが顕れていく。そして、落ちる渦の底で、丸飲みにされてしまうのだ。どうぞ、私を食べて。

「お酒、ちょっとだけなら気分が良くなるの。この前は、なにを話したらいいか判らなくて……ちょっとだけ、気分を上げれば上手く話せるかもって……思って……」

相思相愛という、かけ算を繰り返したあと、の分の1の確率。しあわせというのは、この確率ほどのちいさなものなのだろう。私は掴んだ。そして、顔を真っ赤にした彼も掴んだようだ。ふたりの未来に、もうサイコロなんて要らないんだ。

初乗り料金―本来ならその距離のあいだを、送って貰った。部屋にあがるのは、まだおあずけ。だけど、きっと、時間の、距離と心のメーターの問題。それに、今日は助手席に座った。できることなら、海の見える海岸まで走っていって、みるみる車が白い一軒家に変形して、ふたりの愛の巣になって、一生、子犬も含めて、いつまでも一緒にいたかった。

♥

迂闊だった。

K子とI子のアドレスを消去したにもかかわらず、ブロックするのを忘れていたので、どうやら、レシーブされた。そもそも、宛先の不確かなメールなんて確認しなければ良かった話。K子から、「前の合コンの彼とは、その後、どう?」ってトスが上がり、I子から「あのときの彼が、もう1度アンタと会いたがってる」ってスパイクが打ち込まれた。どうするって、まあ、不戦敗で、いいわ。そしたら、ローテーションでK子からの殺人的メール。「あの人に、アンタのアドレス教えといた」これはサービスだって。

げんなり。どうせ顔の見えない相手だし、無視しておけば良いんだけどね。退社時間間際になって、別の部署のコが話し掛けてきた、「このあと呑みに行かない」。半年前までおなじ部署に居たコ。いまは転勤して、ちょっと離れたところにいるのだけど、今日は出張で本社に戻ってきていた、「明日には帰ってしまうんで」。うん、前々から良くしてくれていたし、それなりに好感を抱いていたから、嬉しくなくはないけれど、ちょっと無理。「あ、お酒呑めなかったっけ」。「じゃあ、なにか美味しいものでも食べに行こうか」

きっと、私、隙があるんだ。脇ががら空きなんだ。結局、食事に行った。本気でふたりきり。久々の本社だったのだから、他にお誘いもあっただろうに。それにしても、どうした？　私のモテ期。

そのコは、前から私をイイと想っていてくれたらしいことを、結構真面目にたらたらと話した。そういえば、転勤後もこまめにメールを送ってきた。私と云えば、なにごとも七面倒くさくて、適当に返していただけなのだけれど、「いつも返信してくれるのは君だけ」なんて云われてしまった。成程、そこが急所だったか。

なんて偶然は悪戯するのだろう。私も結構真面目に、今、好きな人がいて、かなり真剣につきあおうとしているということを、たらたら云って聞かせた。そのコは、「折角、部署が変わって気兼ねなくつきあえるかも、って思ったのに」と「でも、遠距離になっちゃうから、申し訳ないよね」なんて、（初めから私を落とせる気でいる辺りは少し癇に障るれど）物わかりのいい物腰で、愉しく話を聞いてくれた。別れ際に「応援してるよ」とまで。

あーあ。多夫一妻制にでもなってくれればなあ……

♥

天罰覿面（テキメン）。ロータリーに向かったのは、（お酒も入っていなかったし）そんなに遅い時間ではなかったのに、あの運転手は居なかった。どんなに目を凝らしても、透視できるのは、オジサンかオジイサンの団体。メールしても、返ってこない。

誰かを乗せて走っている最中かも知れない。オジサンとオジイサンが、ロータリーを歩く私を見て、空車表示をひけらかしてきたけれど、彼以外のタクシーに乗る理由なんて無い。久し振りに歩いて帰ろう。どうせ――初乗り料金で済むくらいの短い距離なんだ。

途中でCカフェを覗いてみた。彼はやはり居なかった。先の、細い路地の街灯が切れかかっていて、人気(ヒトケ)のないうえに暗く、いかにも私の心の内を顕しているみたいだった。下心がないまでも、他の男の人と食事に行った。惹かれはしなかったまでも、悪くはないかななんて感情を持ってしまった。運転手は、今日もカフェCで待ってくれていたかも知れないのに。携帯が震動したので、あわてて確かめてみると、知らない人からの着信。がっかり。無視。また、数分後に着信。無視。またも、数分後に着信。無視。携帯のボタンを押して着信を切ったはずなのに、私の耳に着信した。「ゃあ」

薄暗い住宅街の路地の先に、男が佇(タ)っていた。あの男。成金趣味の指輪を嵌めた深海魚ズラの男。

「どうして、電話に出てくれないのさ」

男は耳元に携帯をあてて、私と携帯両方に問いかけていた。アンコウのようにたるんだ身体。あの時はスーツと、必要以上にムーディな間接照明相俟って、気がつかなかったが、今日は私服、ブランドモノの服に身を包んでいるものの、色彩も形もちぐはぐで……なんて醜いのだろう。成程、深海魚は光が当たらない暗闇に済んでいる所為か、色彩も形も、おおよそ陸の生物からは想像できない醜いものばかり。

「折角、また、お酒でも呑もうと、誘うつもりだったのに、さ」

しまった、想像以上にやばいヤツだった。着信履歴に跡つけながら、私のあとをつけてくるとは。それにしても、泥酔してしまったとはいえ、一晩過ごしてしまった私に、せめてもの気遣いをしてくれても良いだろう。二度と姿を現さないという形で。

「忘れ物も返したかったんだ」

そう云って取りだしたのは、あの日のパンツ。やばい。こいつ、やばい！　いつからか判らないけれど、多分一日中、シャツの胸ポケットにそいつを忍ばせて、ほかの人が見ていないとしても、屋外で手に持って、女性に迫っている状況―求刑可能。

叫べば良かった。すぐに逃げれば良かった。弱虫な私が、また私の身体のコントロール奪って、顫(フル)えを募らせた。喉が詰まった。脚の力が抜けた。それでも、勇気を振り絞って、まずは右足のヒールを投げつけ、左足のヒールを投げつけ、走りやすくなってから、一目散に脱兎。ダッシュ甲斐無く、大通りの手前で、深海魚の触手に捕まった。なんとかして逃げなくては。恐ろしさと滲む涙で、すでになにも見えなくなっていた。私は優しさなんて微塵も感じられない暴力的な握力に捕まれて、それでもなお、ふりほどこうと、遠心力を利用してバッグの一撃を横っ面に浴びせた。大通りの街灯の下まで滑りこんだ。でも、目が血走った成金男は、なおも、私をねじ伏せようと、ダイオウイカのごとくのしかかってくる。「たすけて！」大通りに出れば、さすがに人気(ヒトケ)がある。警察が来るのも時間の問題。「たすけて！」早くこの、ヌタウナギみたいな男を、しょっ引いて頂戴！　その時、誰かがこのダイオウグソクムシに拳固を繰り出し、私から引き放してくれた―運転手の彼が。

♥

ずっと顫(フル)えが止まらなかった。事情聴取が終わったあとも、ずっと付き添っていてくれた。彼は、やはり、私が駅に着いたときは仕事の最中で、勿論、携帯に出ることもできなかったらしい。客を乗せて、大通りを駅に向かって走っている途中、襲われている私の姿を発見した。彼はすぐさま車を停め、表に飛びだして私を救けた―なんて、なんて英雄的な。今の時代、王子は白馬じゃなくて黒タクに乗ってやってくるのね。因みに、恥ずかしいから、事情聴取の前にパンツだけは奪い返しておいた。

デートのあとの甘い流れ、という理想とはまったく反する形で、彼を私の

部屋に迎えることになった。というか、不可抗力。気が動転していた私は、ほとんどなにも喋ることができなかったし、このままではあぶないと思わせるくらい、混乱して見えたらしい。彼は私の手を握って、部屋まで連れていってくれた。よろけそうな私の肩を抱いて、顫(フル)えている私に水を飲ませてくれた。私をベッドに優しく寝かしつけてくれた。なんだか、陶酔のうちにやるべき恋愛のプロセスを、混乱の中で幾つかすっ飛ばしてしまった。

休むように奨められたものの、眠れず、ベッドの上で膝を抱えている私を、眠らず、見まもっていてくれた。朝になる頃には、うしろから優しく抱きしめてくれていた。

♥

次の日は、会社に電話を掛けて、休むことになった。そもそも、もう一度警察署に来るように云われていた。会社も事情を察してくれて、次の月曜日まで、休ませて貰うことにした。

彼はずっと私の傍にいてくれた。眠れずにいた私に、警察から云われた時間まで、少しでも横になって休んだほうが良い、と、もう一度私を寝かしつけた。彼だって、一睡もしていないのに。

警察にタクシーで送って貰ったあと、もろもろの手続きを終え、またタクシーで、彼は部屋まで送ってくれた。多分、警察署までは初乗り料金くらいの距離だろう。

少しだけ気分も回復してきて、気がつくと寝入っていた。目を覚ますと、いつの間にか、カフェCのお弁当がテーブルに置かれており、その脇で、椅子に座ったまま、彼も寝入っていた。やっと、私も私を取り戻してきた。優しい彼と、優しいお弁当を前に、愛おしい気持ちが込みあげてきた。まだ知り合って間もない私のために……彼をベッドに運び、私はそのあいだにお弁当。そして、シャワーを浴びてこれまでの出来事をすっかり洗い流した。

バスルームから出ると、彼も目を覚ましてた。今や彼のほうが疲労して見え

る。私はコーヒーを淹(イ)れて、残っているカフェCのお弁当を勧めた。どうせだから、シャワーを浴びて、好きなだけ休んでいっていい。そう云ったけれど、彼は遠慮して、ぼちぼち帰ると云った。

「ありがとう」

伝えたかった気持ちは、喉に詰まって、嗄(カ)すれた、かぼそい音にしかならなかった。どうして、素直な気持ちはこと葉にしにくいのだろう。呆れるくらい臆病で、口にしようとしたときには、眇々(ビョウビョウ)とした、ただちいさなこと葉にしかならない。だから、声が届くまで近づいて、きつく抱きしめながら、囁(ササヤ)いた。背中をギュッと。できることなら、このまま、ちぎれるくらいきつく抱きしめて、圧迫された血管の所為で心臓の鼓動が限界まで高まって、血液温度が上がって、私も彼も身体が融け合ってひとつになって、ずっと、一緒に居たかった。

♥

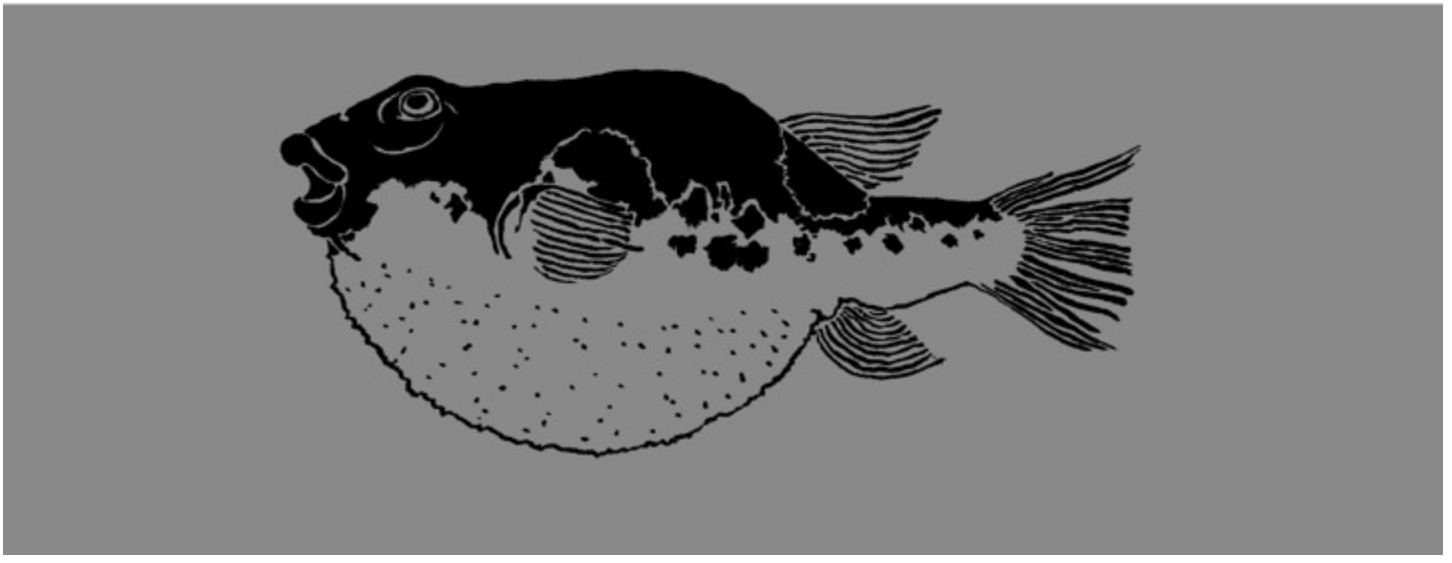
夕方に、両親が私の部屋に来て、慰めたり、勇気づけたり、なんやかんやしてくれた。日曜の夜には帰っていって、なんだかんだで、元通りの生活に戻っていった。そういえば、K子とI子は罪に問われるのだろうか。是非とも有罪判決を下して欲しい。

あれから、運転手に逢っていなかったので、さみしくなった。彼にメールを送ると、今、ロータリーの前で蟻の行列よろしく、働き蟻のごとく、汗水垂らして客を待っているところだと云う。蟻酸だろう。「ちょっと抜け出して、夕食を食べない?」なんて、優しい彼ならば、きっと応じてくれるだろう質問を投げかけた。

「じゃあ、カフェCで」

いかるがつみき

（本名・今井朝子）

1998年、劇団「利根川」に入団。女優活動のかたわら、演出と脚本のアシスタント。2004年、舞台「河豚を捌くように」（同劇団）で脚本家デビュー。'05年「鵜飼ラプソディー」、'08年「来夏ØØ（EOEO）」（劇団「白樺」提供）など。'09年退団。現在はフリーで執筆活動をしている。勿論、ぜんぶ嘘。

知古
文庫
chicoshop